

「貧しいやもめの献金」

ルカ 21:1-4

2020.9.27 南与力町教会朝拝

序：献金についての教え

私たちは礼拝の中で献金をささげています。その献金によって牧師の働きをはじめ、教会の様々な活動が維持され、この会堂も保たれています。その意味で献金は教会にとってとても大切なものです。しかし、聖書にはいわゆる「献金」についての教えはそれほど多くはありません。むしろ少ないとも言えるでしょう。そのような中で今日の箇所はイエス様が積極的に「献金」について教えておられる貴重な箇所と言えるでしょう。

今日の箇所でイエス様が特に目と留めておられるのは「貧しいやもめ」の献金です。すぐ前のところでイエス様は弟子たちに「律法学者に気を付けなさい」と言われ、うわべを取り繕い、自分の名誉や利益ばかりを追い求めている彼らの生き方、振る舞いを批判なさっていました。また律法学者たちは「やもめの家を食べ物にしている」とも言われていました。そういう流れの中で、イエス様は「貧しいやもめの献金」について弟子たちに教えておられるのです。「律法学者」が「こうなってはいけない」という悪い手本であったとするなら、今日の箇所に出てくる「やもめ」は弟子たちが見習うべき「善い手本」と言うことができるでしょう。

①金持ちの献金と貧しいやもめの献金

21章1節

「イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。」

当時、神殿の「婦人の庭」と呼ばれるところにラツパ型の賽銭箱（献金箱）が用途別に13個置いてあったそうです。イエス様はその婦人の庭で座って弟子たちに教えておられたのでしょう。そこから目を上げて、「金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられ」ました。それは神殿税のように決まった額の献金ではなく、自発的にささげる献金でした。続く2節にはこうあります。

「そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て」。

夫に先立たれたやもめは当時の社会において非常に弱い立場でした。女性が自分で収入を得るのは容易ではありませんでした。それゆえ、ここに出てくるやもめも「貧しいやもめ」、すなわち生活が苦しいやもめでした。イエス様はこのやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見ておられました。「レプトン」という言葉は「薄い」を意味する「レプトス」という言葉に由来しています。当時の貨幣の中でこのレプトン銅貨が最も価値の低い硬貨でした。私たちが言うならば一円玉のようなものでしょう。価値としては一デナリオンの128分の一と言われています。私たちが言えば、50円か100円ほどの価値になるでしょうか。すなわちレプトン銅貨二枚というのは100円か200円程度のものです。それは非常に小さな金額、ささいな献金でした。

しかしそれを見ていたイエス様は次のように言われたのです。3節

「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた」

お金持ちたちがいくら献金していたのかはわかりませんが、やもめのレプトン銅貨二枚よりはるかに多かったのは確かでしょう。しかしイエス様は「この貧しいやもめこそが、すべての者よりもたくさん入れた、最も多く献金した」と言われたのです。そしてその理由として4節でこう言われました。

「あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

「有り余る」とは「溢れ出る」という意味があります。金持ちたちはみんな、自分にとって溢れ出るものの中から一部を献金に入れました。自分の生活するには十分のお金があって、そこからあふれ出し、有り余っているものを献金したの。それは彼らの生活にとって痛くかゆくもないものでした。

その一方、貧しいやもめは「乏しい中から持っている生活費を全部入れた」と言われています。「乏しい中から」と訳されているのは「彼女の足りていない分から」と訳することもできます。彼女は自分の生活するお金も足りていなかったのです。しかしそういう「不足している中から」、彼女は何と「持っている生活費を全部」入れてしまったのです。あのレプトン銅貨二枚が彼女の全財産、生活費のすべてだったのです。それゆえに、彼女はすべての者よりも多く入れた、とイエス様は言われるのです。

最初に申しましたように、献金は教会にとって必要な大切なものです。神殿にとっても献金は大切だったでしょう。それによって神殿が維持管理され、神殿での礼拝が保たれていました。実際的な意味では、献金が額の多さが大切であるように思えます。私たちは献金の金額に目を留めがちでしょう。しかしイエス様の判断基準、すなわち神様の判断基準はそれとは違うのです。その金額がいくらかというのではなく、それがその人にとってどういうものなのか。有り余っている中から出されたのか、それとも自分の生活の苦しいような不足している中から出されたのか、そのことを見ておられるのです。しかもこのやもめは「生活費のすべて」をささげたのです。

②私たちが教えられること

ではこのイエス様の教えは私たちに何を教えようとされているのでしょうか。私たちも生活費の全部をささげるように、そのような犠牲を払って献金せよ、ということなのでしょう。そのように読むならば、誰がそれを実行できるのでしょうか。イエス様は本当にそのようなことを私たちに教えようとされているのでしょうか。

当時は献金は収入の十分の一という一つの目安がありました。ではイエス様はここで、献金は十分の一どころか、収入の全部をささげよと言っているのでしょうか。そのように言わばこのイエス様の教えを命令や律法のようにして読んでしまうならば、イエス様がここで教えようとされていることを捉え損なってしまうのだと思います。

そもそもこの貧しいやもめはなぜ「生活費の全部」を献金したのでしょうか。彼女は誰かかそうせよと命じられたのでも、強制されたのでもありません。また律法学者たちのように人に見せようとしてほめてもらうために献金したのでもありません。彼女は自発的に、自らそれをささげたのです。なぜか。詳しいことはわかりません。しかし彼女には神様への愛、そして献身の思いがあったことは確かでしょう。「生活費」と訳されている言葉は元々「命、生活、生涯」という意味があります。そこから命を支える手段である「生活費」をも意味するのです。すなわち、この貧しいやもめは神様に自分の命、自分の生活のすべてをおささげた、献身したとも言えるのです。その神様への献身のしるし、表れとして

この時、生活費すべてを、レプトン銅貨二枚をささげたのでした。そこには神様への愛が込められていたのだと思います。

カトリックの修道女であるマザー・テレサが次のような言葉を残しています。

「大切なことは、いくら与えたかではなく、与えることにどれだけの愛を注いだかです。」

この言葉についてのエピソードを引用させていただきます。

「大きな愛をもって愛するということは、どういうことでしょうか。いきなりこんな風には書き出すと、難し過ぎると思われる方もいるかもしれませんね。しかしマザー・テレサは、それをカルカットに住む四歳の子どもから教えてもらったと言います。まだ、マザー・テレサの活動が今ほど人々に知られていなかった頃の話ですが、一時期、マザー・テレサのところに砂糖がまったく入らなくなったことがありました。そのため、毎日お世話をしている何千人もの孤児、病人、貧しい人たちにも砂糖を分け与えることができませんでした。

その四歳の子どもは、学校で先生から話を聞くと両親に言いました。

「ぼくは、今日から三日間砂糖を食べないよ。ぼくの分をマザー・テレサにあげるんだ」
子どもの両親はそれまでマザーのところへ行ったことはなかったのですが、子どもにせがまれ、三日後に子どもを連れて訪ねて行きます。その子は、マザー・テレサの名前を正しく発音できないくらい幼く小さい子どもでした。しかし、手にしっかりと砂糖の入った小さなビン握りしめていたのです。そして、おずおずとそのビンをマザー・テレサに差し出しました。それは、男の子がマザー・テレサや貧しい人たちを助けるために、三日間自分を犠牲にしてためたものだったのです。

マザー・テレサは、この話を世界中至るところでしました。

もちろん、日本でもしました。

彼女は次のように語ったものです。

「その小さな子どもがくれたものは、それを私たちが貧しい人々に分け与える時に、計り知れないくらい大きなものとなって、彼らの手に渡ることでしょう。私は、その子どもから本当に大切なことを学びました。この幼い子どもは大きな愛で愛したのです。なぜなら、自分が傷つくまで愛したからです。この子どもは私にどのように愛するかも教えてくれました。大切なことは、いくら与えたかではなく、与えることにどれだけの愛を注いだか、であると」

これは貧しいやもめの献金と似ているのではないのでしょうか。ホセア書6章6節には「わたしが喜ぶのは愛であっていけにではない」という御言葉があります。神様はいけにえそのものではなく、そこに込められている愛を喜ばれるのです。そしてその愛は払った犠牲と結びついています。あの男の子は自分が三日間砂糖を食べないという犠牲を払いました。マザー・テレサはそれを「自分が傷つくまで愛し

たからです」と表現しています。貧しいやもめも自分の生活費のすべてを犠牲にして神様に献金をしました。そこには神様への大きな愛が込められていたのです。逆にお金持ちは金額としては多くささげたかもしれませんが、それは自分の有り余っているものの中から出したものであり、そこに愛は込められていなかったのです。やもめの献金は誰よりも小さな額でありながら、そこには誰よりも深い神さまへの愛や感謝の思いが込められていたのです。それゆえに神様はその献金を誰よりもたくさんのものでして喜ばれるのです。

やもめは生活費のすべてをささげるという犠牲を払いました。しかしその犠牲は悲壮感に満ちたものでも、嫌々ささげたものでもなかったはずです。彼女がそのようにささげた背後には、彼女の神様への信頼、神様が自分を必ず養ってくださる、必要を満たして下さるといふ信頼があったはずです。そうでなければ、全財産のレプトン銅貨を二枚ともささげることなどできなかったでしょう。イエス様は弟子たちに空の鳥や野の花を指して、次のように言われました。

「あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思い悩むな。それはみんな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。」(ルカ 12:29-31)

このやもめはそのような神様への信頼があったからこそ、思い煩いから解放され、全生活費であるレプトン銅貨を二枚ともささげることができたのです。それは彼女の自由で自発的なささげものでした。

彼女がそのようにすることができたのは彼女が自分への神様の愛と憐れみを確信していたからでしょう。そしてその神様の愛と憐れみは私たちにも注がれています。その神の愛は御子イエス・キリストの十字架の犠牲において決定的に示されました。神様はご自分の愛する独り子を犠牲にするほどに、私たちを愛してくださいました。キリストもまたご自分の命を犠牲にするほどに私たちを愛してくださいましたのです。それゆえ私たちもその神様への感謝と愛の心から、自発的にささげる者でありたいと思います。最後に第二コリント 9:7-8 (p. 335) をお読みいたします。

「各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。神は、あなたがたがいつもすべての点ですべてのものに十分で、あらゆる善い業に満ちあふれるように、あらゆる恵みをあなたがたに満ちあふれさせることができになります。」